ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

　雅也と良助の試合から十分後。最後に良助と拓馬がやることになった。審判は雅也だ。

　二人は離れて向かい合う。お互い、ボールを持って構えていた。拓馬はまだ、最初に出すポケモンの選抜に迷っているようで、ブツブツと何やら呟いていたが、いつものことなので二人は気にしない。

「バトルスタート！」

　雅也は右手を上に挙げて叫んだ。二人が、同時にボールを投げる。

「行け、エアームド！」

「エイパム！」

　拓馬が出したポケモンは、鋭い嘴と銀色の体、紅色の羽が特徴の鳥ポケモンだ。分類は『よろいどりポケモン』であり、その分類に恥じない見た目の格好良いポケモンである。重そうな見た目と反して、実は結構軽い。

　エアームドはボールから出ると、空高く舞い上がる。上空から、鋭く尖った目で、地上で尻尾をユラユラとさせているエイパムを睨む。

「エイパム、スピードスター！」

　エイパムの口から吐き出された、小さな黄色い星型のエネルギー弾がエアームドに襲いかかる。広範囲に拡散されたエネルギー弾は、エアームドの逃げ場を塞ぐ。

「エアームド、守る！」

　それでも慌てることなく、拓馬はエアームドに指示を飛ばす。青い光がエアームドを包み込み、直撃しそうになった星型エネルギー弾を全て防ぎ、灰色の煙が巻き起こる。あの青い光は、シールドである。これが『守る』という技で、拓馬が最もよく使っていた技だ。

　青い光が消えた刹那、エアームドは羽を畳んで、煙の中からエイパムめがけて急降下する。

「アイアンテール！」

　フェイントもなしに、真っ直ぐ突っ込んでくるエアームドを見た良助は、ニヤリと笑って叫んだ。エイパムが尻尾を銀色に光らせて構える。急降下してきたエアームドにタイミングを合わせて、思いっきり尻尾を振り下ろす。銀色の硬くなった尻尾は、エアームドの頭に直撃。エアームドはそのまま地面に叩き付けられた。

「よっしゃ！」

　良助が歓声を上げる。拓馬はそんなエアームドをちょっとの間見つめ、ゆっくりとメガネをブリッジを左中指でクイッと上げる。

「へっへーん、エアームド、気絶！」

「迂闊だよ、良助」

　喜びの声を上げる良助に、拓馬は冷静にそう呟く。だが、そんな拓馬の口元は、してやったりと言うように嬉しそうに上がっている。

　拓馬の呟きが終わった瞬間、エイパムは自分の右脇腹に衝撃を感じた。それがエアームドだとエイパムが気づいた時にはもう、エイパムは大きく吹っ飛び、視界は青空を写していた。

「おぉー、身代わりって、あんな使い方出来るんだねぇー」

　一部始終を見ていた雅也は、そう言う。さっきエアームドが『守る』を使って、それで出来たバリアに『スピードスター』が当たって煙を巻き上げた時、こっそりエアームドは『身代わり』という技を使っていたのだ。正確には、『守る』を使う直前に『身代わり』を使い、出てきたエアームドにそっくりな人形は、『守る』の青いバリアで支えられていたのだが。バリアが消えて、支えを失い、エアームドの足で蹴り飛ばされた人形はエイパムめがけて落ちていき、その間にエアームドはどこかに隠れる。そして、隙を見てエイパムに突っ込んだのだ。

「やるねぇ、そうこなくっちゃ……」

　良助もそれに気がついたらしく、悔しそうにそう呟く。それでも、良助は拓馬の作戦に感心していた。それは雅也も同じである。

「エアームド、スピードスター！」

　間髪を容れずに拓馬はそう指示を出すと、さっきと同じ星型エネルギー弾が、今度はエアームドの嘴からエイパムに飛んでいく。それは起き上がりかけていたエイパムに命中して、エイパムを大きく吹っ飛ばし、気絶させた。

「よくやった、エイパム。戻ってこい……バルキー！」

　素早くエイパムを戻して、今度は良助はバルキーを出す。タイプ相性的には、バルキーの方が不利だ。

　何か考えがあるのだろうと思った拓馬は、バルキーを注意深く見る。相変わらず、仁王立ちで目を瞑っているが、それ以外に変わったところはない。

「エアームド、つつく！」

　迷ってても仕様がないと判断した拓馬は、指を二回パチンと鳴らしてそう叫ぶ。拓馬が指を二回鳴らすのは、『様子見で』という合図だ。勿論、この合図の意味は、誰にも知られていない。

　バルキーの上空を何度も旋回していたエアームドは、背後から軽く嘴を突き出して攻撃しようとする。

　その時だ。

「バルキー！」

　良助がそう叫ぶと、バルキーは目を閉じたまま、後ろを振り向き、突き出された嘴を両手で掴む。そして、目をカッと開いた。

「しまった！」

　拓馬がそう叫んだ時にはもう、エアームドはバルキーに投げられて、嘴から地面に突き刺さっていた。よく見れば、その衝撃で、エアームドは気絶している。

「……！　戻れ、エアームド！」

　驚いた拓馬は暫く固まっていたが、やがて落ち着きを取り戻したように、ボールにエアームドを戻す。そして、二個目のモンスターボールを取り出し、投げる。

「行け、ベイリーフ！」

　さっき進化したばかりのベイリーフが出てくる。気合を入れるように鳴いた後、毅然とした表情でバルキーを睨んだ。バルキーは再び、目を閉じている。だが――

「バルキー、バレットパンチ！」

　良助の指示が聞こえると、目を開けて、ベイリーフに突っ込んでいく。銀色に光り輝く右の拳で、素早くベイリーフに殴りかかった。が、その拳が当たる直前、ベイリーフは頭の葉っぱでそれを受け止める。弾かれる拳。それでもバルキーはもう一度、殴りかかった。そして、再びそれを頭の葉っぱで受け止めるベイリーフ。その応酬が続く。

「……今だ！　葉っぱカッター！」

　もう何度目かの時、大きく弾かれた拳に体を持っていかれ、右足が地面を離れたバルキーの隙を見逃さず、拓馬は叫ぶ。ベイリーフの首の周りのドリル状の葉っぱが光り、空中から無数の小さな葉っぱが現れる。

　その瞬間、良助とバルキーの目が光る。

「……そう。それでいい！　今だ、バルキー！」

葉っぱはピンっと伸びて、バルキーめがけて放たれるのと、倒れかけたバルキーが、自身を支えている足を軸に一回転するのは同時だった。飛んでくる葉っぱをものともせず、バルキーは右足で踏み込むのと同時に、左の拳を振り上げる。

「マッハパンチ！」

　そして、見事な左ストレートが、ベイリーフに顔に当たる。そのまま、ベイリーフは仰向けに倒れ、気絶した。

「……がんばったね、ベイリーフ。休んでくれ」

　流石に二匹連続でバルキーに倒されたのはショックだったようだ。ボールにベイリーフを戻す拓馬の声に、ハリはない。

　それでも、最後のボールを取り出し、投げた。

「行け、リーフィア！」

　最後に出てきたリーフィアを見ても、バルキーは身じろぐことなく、三度目を閉じる。全身はさっきの『葉っぱカッター』を受けたせいで、所々切り傷が出来ているものの、その呼吸に乱れは無い。

　暫く二匹は動かなかった。バルキーはともかく、リーフィアも動かないのは、二匹連続で気絶させたバルキーを警戒してのことだろう。

　そんな中、先に動いたのはリーフィアだ。

「電光石火！」

　高速でバルキーに突っ込んだリーフィアだが、バルキーに当たる直前で横に飛ぶ。自分に近づく気配を感じたバルキーが、目を開けたからだ。素早く背後に回るリーフィアだが、その動きに合わせ、バルキーも振り返る。リーフィアは、バルキーと距離を取ろうと後ろに飛ぶ。が、そんなことは良助は許さない。

「バルキー、マッハパンチ！」

　開いた距離をあっという間に詰めるように、バルキーはリーフィアに左拳を光らせて突っ込む。再び左ストレートが放たれる、その時。

　リーフィアは頭の葉っぱを光らせて、バルキーの左拳を下からかきあげた。『リーフブレード』だ。バルキーの拳は空を舞い、そのまま前に倒れこむ。

「何っ？」

「狙ってたよ、その攻撃！」

　拓馬が右の人差し指を、バルキーに向ける。そして、口を開いた。

「マジカルリーフ！」

　リーフィアの体の周りに『葉っぱカッター』とは違う、虹色の光を纏った小さな葉っぱが無数に現れ、バルキーの体を切りつけた。

　小さな爆発がいくつも起こり、煙が出る。それが止むと、バルキーはその場に倒れた。目を回し、気絶している。

「や……やっとバルキー倒せた……」

「むぅ……でもバルキー、おつかれさん。二匹倒しただけでも十分だ！」

　そう叫んで、良助はバルキーをボールに戻し、同時に最後のボールを投げた。中から出てきたのはオーダイルだ。

「そんじゃ、行くぜ。オーダイル、冷凍パンチ！」

「リーフィア、回りこめ！」

　振り下ろされる左拳にタイミングを合わせ、リーフィアは右に横っ飛びして、そのままオーダイルの背後に回り込む。空を切った拳は、地面に当たって、肌色の砂が舞う。

　だが、回り込んだリーフィアの左脇から、青く光った尻尾が襲いかかった。『アクアテール』だ。リーフィアは吹っ飛ばされ、地面に右脇を打ち付ける。

「リーフィア！」

「今だ！　オーダイル、もういっちょ冷凍パンチ！」

　ヨロヨロと立ち上がったリーフィアに、今度は水色に光った右拳が襲いかかる。連戦の疲れから、流石に躱しきれず、リーフィアの真上から『冷凍パンチ』が命中した。

「リーフィア、気絶！　勝者、良助！」

　目を回しているリーフィアを見て、雅也はそう宣言する。拓馬の口から長く息を吐く音が聞こえ、良助はガッツポーズをとった。

「へっへーん！　あのアクアテール、凄かっただろ？　作戦だったんだぜ？」

「ああ。さすがの僕も、予想外だったよ……」

　良助の得意そうな顔に、やれやれといった様子で髪を掻き上げて拓馬は言った。そして、お疲れ様、の声と共にリーフィアをボールに戻す。

「でも、拓馬のエアームドの『身代わり』の作戦もビックリした」

　雅也も、その会話の中に入る。良助はオーダイルの頭を撫でながら、頷く。

　時間はもうお昼なので、三人は今日のバトルについてあーだこーだと話し合いながら、道場の中に入っていった。